

## 悪源太が誅せられる

同じき二十五日に、鎌倉の悪源太が、近江の國の石山寺の邊に忍んでゐられたのを、難波三郎經房の郎等が生捕つて、六波羅に率ゐてまゐつた。その前の十八日に、三條烏丸の或所に見すばらしい姿をしてられたのを、平家の大勢が取圍みただけでも、打破つて落ちられたのである。といふのは、悪源太は、父の教への通りに、東山道を攻め上らうとて、飛驒の國に下らると、軍勢の附く事が一通りでない。ところが、義朝の討たれたことがわかると、みな變心して散つて行つて、自分一人になつたので、自害をしようと思はれたが、いたづらに死ぬよりは、親の敵の清盛父子のうち、一人なりとも討つて、無念を晴らさうと思ひ返して都にのぼり、六波羅の様子をうかがつてゐられると、左馬頭の郎等で、丹波國の住人志内六郎景澄といふものに行き逢つた。

「どうだお前、曾て結んだ主従の契りは。」

といはれると、

「なんでお忘れ申しませう。とは申せ、わたくしは不束で、これと申す知人もございませぬから、敵をだまして命をつながうと存じ、知合の者の世話で、今は平家の下役人となつて居ります。お目にかかれて幸ひです。どうなさるお考へです。」

といふので、すなはち景澄を頼つて、彼を主人とし、義平は下郎になつて、太刀を佩き、物を持つて六波羅に入り、敵に近づいて機會の來るのを待つてゐられた。

景澄はいつも食事をするのに、下郎と一しよにゐて、決して人に見せなかつたので、家主が不安に思つたのか、何げなく障子の隙から見ると、景澄の膳をば下郎の前にするゑ、下郎の飯をば景澄が食べたので、あゝこの人は源氏の郎等だと聞いてゐるが、疑ひもない悪源太とやらを隠して、六波羅を窺つてゐるのだな。よそから分つてはいけなからうとて、急いで平家にこの由を告げたので、取るものもとあへず、十八日の午後六時頃に、難波次郎經遠が三百餘騎で押しよせて、四方を取りまいて、

「鎌倉の悪源太はゐられますか。六波羅から難波次郎經遠がお迎へに參りました。」

と呼ばはると、御曹司は袴の端を高くはさんで、石切を抜くとそのまま、

「源義平はこゝにゐる。寄れや、手並のほどを見せてやらう。」

とて走り出で、眞先きに進んだ兵を四五人斬り伏せて、小屋の軒に手を打ちかけ、ひらりと  
のぼつて、家續きにいづくともなく失せられたのが、石山の邊にゐられたのである。

悪源太が六波羅で言はれるには、

「我れ敵にうかゞひ寄らうとて、或時は馬の口を控へて門にたたずみ、或時は履をささげて、  
縁先まで行つて近づかうとしたが、運がつきたので本意を遂げずに、生きながら捕はれたのは、  
止むを得ない次第である。義平ほどの大事の敵を、しばらくでも生かしておくのはよろしくな  
い。すみやかに誅せられよ。」

とて、その後は物もいはれない。やがて難波三郎に仰せられて、六條河原で誅せられたが、  
敷皮の上になほつて、少しも臆さずに申されるには、

「敵とはいへ、義平ほどのものを、眞晝間に河原で斬られるとは遺恨である。去る保元に、  
多くの源平の兵どもが誅せられたが、晝は西山、東山の片ほとりで斬り、たま／＼河原で斬ら

れるのを、夜に入つてから斬られたのである。弓矢をとる身の習ひは、今日は人の身の上が、  
明日は我が身の上であるものを、平家の奴ばらは、上下共にすべて無情で、物も知らない者共  
である。去年、熊野詣の時、途中に馳向つて撃たうといつたのを、おびき寄せて一度に滅ぼさう  
と信頼といふ馬鹿者が言つたばかりに、けふかういふ恥を見るのが口惜しい。湯淺、藤代の邊  
で取り籠めて討つか、安部野の方に待ちうけて、一人も残さず討取つてやつたものを。」

と言はれると、難波三郎が、

「何を今さら返らぬ繰言をいはせられます。」

と申すと、悪源太はあざわらつて、

「うむ、よく言つた。いかにも我が爲には返らぬ過去の繰言だ。やいおのれは、義平が首を  
討つほどの者か。晴れの仕事だ。うまく斬れ。へたに斬るとしやつつらに喰付くぞ。」

と言はれたので、

「馬鹿なことを仰られるものだ。なんでわたしの手にかけて斬る首が、どうして頬に喰ひ  
つきます。」

と申すと、

「まことに今喰ひつかうといふんではない。いつかは必ず雷いかづちとなつて、蹴殺さうといふんだ。」

とて、殊更に首を高く上げられたので、經房つねぶさが太刀を抜いて、うしろへまはると、

「うまく斬れ。」

とて、振りかへつて睨にらまれた目つきは、全くただの人とは見えなかつた。それだからか、つひには言つた通りに、雷いかづちとなつて、難波三郎なんばのをば蹴殺されたのである。

註

(一)湯淺も藤代も紀伊國の地名である。

### 清盛の出家并に瀧詣附たり惡源太が雷いかづちと成る

仁安二年十一月、清盛は病におかされ、年五十一で出家して、法名ほふみやうを淨海じやうかいと申した。出家の

おかげか、久しく煩つた病氣も次第によくなつて、翌年の夏の頃には、一門の人々が銘々に全快の祝ひをした。同じき七月七日に、攝津の國の布引の瀧を見ようとして、入道を始めとして平氏の人々が下られたのに、難波三郎なんばのだけは、夢見むみが悪いからとて、供をしなかつたので、仲間なかまの者たちが、

「弓矢を取る身が、なんで夢見むみや物忌ものいみなどをいふんだ。そんな臆した話があるか。」

と笑つたので、經房つねぶさもなるほどと思つて走り下り、夢がさめて參つた由を申すと、却つて興がつて、諸人が瀧を眺めて感を催す折柄、一天俄かに搔曇かきり、夥しく雷かみなりが鳴つて、人々が興をさますと、難波三郎なんばのが申すのに、

「わしが恐れてゐたのは此事である。先年、惡源太が最後の言葉に、『いつかは雷いかづちとなつて蹴殺さうといふんだ』とて睨にらんだ目が、いつも見えてたまらないのに、あの人が雷いかづちになつたと夢に見たんだよ。今、手鞠てまりぐらゐるものが、東南のほうから飛んだのを、みなさんは見られなかつたか。あれこそ義平の靈魂れいこんよ。きつと歸つて來る時、經房にかゝつて來るのだらう。それにしては太刀は抜いてゐるやうものを。」

と言ひも終らぬうちに、烈しい雷がおびただしく鳴つて、經房の上に黒雲がおほつたと見ると、微塵になつて死んでゐた。太刀は抜いてゐたが、鐔本まで反り返つてゐたのを、成佛供養のために寺造りの釘にするやうにと寄附された。恐ろしいどころの話ではなかつた。清盛入道は弘法大師の御筆をお守にかけてゐられたのを、恐ろしさのあまりに、頸にかけたままで、しきりに打振り／＼せられた。まことにお守の徳であつたか、近づくやうに見えたが、つひに空へあがつた。悪源太は十三の年に鎌倉に下り、去年十九で都にのぼり、これといふ思ひ出になるやうな出世もせず、生年二十で、永暦元年正月二十五日に、つひにむなしくなつたのである。

註

(一)仁安は六條天皇の時の年號で、義平が斬られた時から八九年の後の事だが、前の章について、難波三郎の死を語らんが爲に、ここに出したのである。

### 頼朝が生捕られる附たり常葉が落ちられる

同じき二月九日、義朝の三男の前右兵衛佐頼朝が、尾張守頼盛の部下に生捕られて六波羅へ着かれた。同じき次男の中宮大夫進朝長の首も差上げられた。といふのは、かの尾張守の家來、彌平兵衛宗清が尾州から都へのぼつて來ると、不破の關のむかうの關が原といふところで、小綺麗な少年が、宗清の大勢におそれ藪の蔭へかくれたので、怪しんで搜したところ、隠れる所がなくて捕はれたが、宗清が見ると、兵衛佐殿であつたから、非常に喜んだ。そこでおつれしてのぼる途中で、青墓の大炊が家に泊つた。うす／＼耳にしてゐた事もあつたので、それとなく裏庭へ出て見まはすと、新らしく壇を築いたところに卒都婆を一本立ててある。すなはち其下を掘らせて見ると、幼い人の首と骸とがさしあはせて埋めてある。これを取つて、事の仔細をたづねると、仕方なく大炊はありのまゝに申した。宗清は喜んで同じく持參したのである。よつて頼朝をば、先づ宗清にあづけておいた。

其時、延壽腹の姫君が、兵衛佐の召捕られて都へ上られると、

「わたしも義朝の子であるから、女子であつても、つひにはよもや助けられまい。一人々々失はれるよりは、せめて佐殿と一しよに冥土へ旅立ちたい。」

とて伏し沈んでゐられたのを、大炊と延壽とがいろ／＼に慰めて取りとどめ奉つた。その時  
も過ぎると、もうそんな事もあるまいと思つて、心をゆるしたためか、二月十一日の夜に、夜  
叉御前はたゞ一人で青墓の宿を出で、はるかに離れてゐる杭瀬河に身を投げて失せられた。十  
一歳であつたといはれる。武士の子は、どうして幼い女の子までこんなにも猛くあるのだらうと、  
哀れを催さぬものもなかつた。母の延壽は、情愛の深かつた頭殿にもおくれ奉り、その形見と  
も思つて慰めてゐた姫君にも別れてしまつたので、一通りでない悲しさに、同じ流れに身を沈  
めようと歎いたのを、大炊がさまざまに言ひなだめたから、母の心も破ることが出来ないで、  
せめてはとて尼になつて、亡夫ならびに姫君の後世を一心に弔はれたといふことである。

六波羅から左馬頭の子らを捜されたのに、すでに三人は出て来た。兄の二人は、もはや首を  
獄門に懸けられた。頼朝もやがて誅せられるであらう。この外、九條院の雑仕、常葉の腹に三

人ある。みな男子であるとして、捜されたので、常葉はこれを聞いて、

「故頭殿におくれ奉つてどうしやうもない中にも、この忘れ形見があればこそ、けふまでも慰  
められて来たのに、もし敵にでも取られたら、片時も堪へて生きてゐられさうもない。といつ  
て、これといふ確と隠れられるやうな身寄もない。自分の身一つでも隠しにくいのに、三人の  
子供を連れてゐては、誰がしばらくでも宿してくれよう。」

と泣きかなしんでゐるが、どう考へてもよい分別がつかないので、

「年來おたのみ申してゐる観音様におすがり申さう。」

とて、二月九日の夜に入つて、三人の幼い人を引きつれて清水寺へ参つた。母にも知らせま  
いと思つたので、小女の一人をも連れずに、八つになる今若をば先に立てて、六つの乙若をば  
手を引き、牛若は二つであるから懐に抱いて、夕暮に宿を出で、足にまかせて進つて行つた心  
の中は哀れである。

佛前に参つても、二人の子供をわきにすゑて、たゞさめ／＼と泣いてゐた。夜もすがらの祈  
願にも、

「わたしは九つの歳から毎月のお参りをはじめて、十五になりますまでは、毎月十八日に普門品を三十三度づゝ読み奉り、その年からは毎月法華經を三部づゝ、十九の年からは毎月この三十三體のお姿を寫し奉つてをります。このやうな志を、大慈大悲の御誓で御照覽あつて知らしめられたら、わたしのことはともかくも、ただ三人の子供のかひなき命をお助け下さいませ。」

と繰返した。實際、春の花のやうな三十三身の御功德には、匂はぬ袖もなからうし、秋の月のやうな十九説法の御功德には、照らさぬ胸もなからうから、さすがに千手觀音も、あはれと御覽になられたらう、と思はれた。

やつと曉にもなつたので、住持のすまひへ入つたが、今までは左馬頭の最愛の妻であつたから、參詣の折々には、お供の者まで、綺麗で美しかつたのに、今はそれに引きかへて、身の装ひのみすばらしいばかりでなく、盡きない歎きに泣き萎れた姿が、目もあてられないので、住持の僧もあまりの悲しさに、

「年來の御情を、どうしてお忘れ申しませう。幼い人もおかはいさうですから、しばしはこ

こに忍んでおいでなさいませ。」

と申ししたが、

「お志は嬉しうございますが、六波羅に近いところですから、しばしもどうかと思ひます。本當にお忘れでなかつたら、佛神の御憐みより外は、頼みにする事もございませんから、觀音様によく〜お祈り申して下さいませ。」

とて、まだ夜の明けきらないうちに出かけたので、住持は泣く〜、

「唐の太宗は佛像を尊んで、春の風に百花の咲き榮えるが如く一生を榮華のうちにおくり、漢の明帝は經典を信じて、秋の日の長く冴え渡るが如く壽命を永く保つたと申しますから、きつと佛の御助があらうとぞんじます。」

と慰めた。

行先を宇陀郡としてゐたので、大和大路について、南をさして歩いたが、ならばぬ旅の朝立で、道のべにおく露よりも自分の涙がなほ繁く、袂も裾も濡れしをれた。二月の十日のことであるから、餘寒はなほはげしく、嵐に凍つた道芝の氷に足は破れ、血に染む衣の裾に行くほど濃

くなつて、子ゆゑに難儀をしてゐるのには、よそから見ると人の袖まで濡らさせた。やつと伏見の叔母のもとまで尋ねついたが、以前、源氏の大將軍の奥方などといった時こそ、ちやほやしてもてなしたれ、今は謀叛人の妻子となつたので、會つては面倒だとも思つたのか、物詣に行つたとて、無情にも會はうとしなかつたが、もしやと暫く待つてゐた後、待ちきれなくなつて、そこを出ると、日はもうやがて暮れかけた。外には立寄るべき所もないから、あやしげな柴の門の前にたたずんでゐると、内から女が出て来て、深切に泊めてくれた。世を忍ぶ身の旅寢であるから、物憂い事のみが多く、今宵も竹の柱の宿に、世にながらへるかひもない命を生きて、獨り歎くばかりである。昔の七輔と思ふ人はない。とはいへ、その夜も三輔にただひとり、伏見の里に夜を明かして、立ち出ればやがて木幡山である。一馬はあらばや、かちにも、君を思へば行くぞとよ」と、幼い人に歌つて聞かせたりしながら、勵ましく連れて行くと、此人々は歩み疲れて平臥してしまはれる。常葉が一人を抱いてゐる上に、二人の子供の手をひいて、腰をおさへて行きなやんでゐる有様は、目もあてられない。道を行きかふ人も、そのさまを見て怪しむと、これも敵方の人ではないかと膽をつぶすのに、旅人も哀れに思つて、見る者ごと

に負つたり、抱いたりして助けて行くうちに、泣く／＼大和の國の宇陀郡龍門といふところに尋ねついで、伯父を頼つて隠れてゐた。

## 註

(一) 普門品は法華經の中の一品で、觀世音菩薩普門品といふ。觀世音菩薩の徳を述べて、これを念ずる者があれば、菩薩がその音聲を聞いて、すぐに其者の願望を満たしめ、惱苦を救ふ由をいつてある。

(二) 觀世音菩薩は三十三身に變化して、娑婆世界を遊行し、衆生の爲に說法教化すといふところから、三十三體のお姿といつたので、即ち觀音の像である。なほ三十三身といふのは、佛身、辟支佛身、聲聞身、梵王身、帝釋身、自在天身、大自在天身、大將軍身、毘沙門身、小玉身、長者身、居士身、宰官身、婆羅門身、比丘身、比丘尼身、優婆塞身、優婆夷身、婦女身、童男身、童女身、諸天身、龍身、夜叉身、乾達婆身、阿修羅身、迦樓羅身、緊那羅身、摩睺羅迦身、人身、非人身、執金剛身、及び本來の觀世音菩薩身の三十三である。

(三) 三十三身のうち、本來の菩薩身を除き、童男童女を一身とし、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆身を一身とし、諸天、龍、夜叉、乾達婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦、の八部衆身

を一身とし、人身、非人身を省くと十九身となる。この十九身を以て救ふべきものには、即ちこの十九身を現じて説法をする。これを十九説法といふのである。

(四)清水寺の本尊は千手観音である。

(五)大和の東北にある郡。

(六)賀茂川の東岸の大通りである。

(七)『袖中抄』の歌に、「陸奥の十輔のすがごも七輔には君をしなして三輔にわれ寝ん」とある。輔は薦を編む緒である。即ち、十編の廣い敷物の七編には君を安く寝させて、三編だけにわれは寝よう、といふのである。で、ここは、その七輔にと思ふ人がないといふのだから、歎くは自分だけで、憂ひを共にすべき夫がないといふことになる。

(八)當時の子守歌か俗謡かであつたらうといはれる

### 頼朝が遠流に宥められる附たり吳越の戦

さて、兵衛佐頼朝は、まだ宗清のもとに居られたので、尾張守頼盛から、丹波藤三國弘といふ小侍を一人つけられた。もう今日明日にも誅せられるであらうと聞えたので、宗清が、

「お命を助かりたいとはお思ひになりませんか。」

と申すと、佐殿は、

「この前の保元には多くの叔父や親類を失ひ、今度の合戦には父が討たれ、兄弟がみな亡くなつたので、僧、法師にもなつて、父祖の後世を弔ひたいと思ふから、命は惜しいぞ。」

と言はれたので、宗清もあはれに思つて、

「尾張守の母の池の禪尼と申すは、清盛の爲には繼母でございしますが、大切にされて居りますから、あの方などについて頼まれましたら、ひよつとお命がお助かりになる事もございませう。あの尼は若い時から慈悲深い方であられます。それに、先達て参りました時に、『お前のところに頼朝がゐるさうだが、どんな風の者か』とお尋ねになられたので、お年に比べて殊の外に大人びてゐられます。御様子が右馬助殿によく似させられて居ります』と申しますと、さも懐しげにおぼしめした御様子でございました。」

とお話し申すと、

「それにしても誰が申してくれよう。」



といはれたので、

「さうお考へでしたら、かなはぬまでもわたくしが申して見ませう。」

とて、池殿へ参つて、

「何者が申しましたのか、あなたさまが大の慈悲者でおはしますことを知つて、『どうか頼朝が命を助けるやうにお願ひ下さいませ。父の後世を弔ひます』と申されましたが、かはいさうでございます。よろしきやうにお取計ひ下さいませ。」

と申すと、

「一たい頼朝に、尼を慈悲者とは誰が知らせたのか知ら。いや、故刑部卿の時は、多くのものをお願ひして許してやつたが、今はどうであらう。それにしても右馬助によく似てゐるといふのに、かはいさうな。家盛さへゐるならば、鳥になつて雲を凌ぎ、魚になつて水にも入り、本當に來世で逢へるといふなら、今すぐに死んでも行きたいと思つてゐる。それで、いつ斬られることに定まつたのか。」

といはれたので、

「十三日と聞いて居ります。」

と申すと、

「かなはぬまでも申して見よう。」

とて、小松殿が、其時の勳功で伊豫守となられたのが、正月から左馬頭に轉じられたのを呼び申して、

「頼朝が尼について、命を助けるやうに願つてくれ、父の後世を弔ひたいと申してゐるが、あまりにかはいさうです。よいやうにいつておくれ。ことに家盛が幼立に少しもちがはないと聞くと、なつかしくも思ふ。右馬助はそなたのためにも叔父ですよ。頼朝を助けるやうにお願ひして、家盛が形見に尼に見せておくれ。」

と言はれたので、重盛はまるつて父にこの由を申された。

清盛は聞いて、

「池殿の御事は、亡き父上の生きてゐられるものと思つてをるのであるから、どんな眞逆様の仰せであつても、背くまいとこそ思つてゐるが、此事は中々重大である。伏見中納言や、越

後中將などのやうなものなら、何十人助けておいても、差支あるまい。大抵弓矢を取る者の子孫は、それとは異なる上に、義朝などが子どもは、幼くとも油断がならないものを。殊に頼朝は、官位も兄に超えたのは、すぐれたところがあるからだらう。父もそれを見込めばこそ、家重代の寶の中でも、とりわけ祕藏の物具などを與へたのだらう。かたぐ助けておくわけには行かないものを。」

とて、もつての外の不機嫌である。

重盛が歸つてまゐつて、かなへられない申出である由を申されると、池殿は涙を流して、

「あゝ昔が戀しい。忠盛の時であれば、これほどに軽くは思はれまい。一門の源氏がみな滅んでしまつてゐる。あの幼い者を一人助けておかれたところで、どれほどの事があらう。前の世に頼朝に助けられたからでもあらうか、聞いた時からふびんで可哀さうでなりません。そなたのとりなしをおろそかとは思ひませんが、一つは使の申しやうといふ事もありますのに、なぜ心からまじめに打ちくどいて、それでもなほ聽かれずに、つひに失はれるなら、尼がかひない命を生きても仕方がない。其上、右馬助の面影に似てゐると聞いてからは、いつしか家盛の

事が思はれて、はたと胸がふさがり、湯水も氣持よくは飲まれぬから、もう長くもあるまいとも思つてゐる。どうぞ尼が命を生かさうと思ふならば、頼朝を助けてやつておくれ。」

と歎かれたので、重盛も迷惑に思はれたが、涙をおさへて、

「さやうに仰せられるなら、今一度、仰せの趣きを申して見ませう。同じくは尾張殿をもお添へ下さい。共々に仰せの由を委しく話ませう。」

とて、頼盛と共に重ねてこの由を申されると、清盛もさすがに木石ではないから、思案に暮れてゐられたので、重盛は、

「女性のあどけない御心に思ひしづんで申させられることを、さやうにばかりどうして仰せられます。よろしきやうに御取計ひなさいませんと、お恨みが深からうとぞんじます。あの頼朝が誅せられましても、我が家の果報が盡きるべきものならば、長くつゞきはいたしません。

當家の運が末になれば、諸國の源氏がいづれか敵にならないものがあるませう。又、助けておかれたところで、榮耀が子孫に及ぶべきものならば、何の恐れるところがあるませう。」

と、道理をつくして申されたので、先づ十三日だけは延ばされて、たしかな返事はなかつ

た。

それで、けふは斬られる、あすは失はれるなどと噂されたが、その日も延びたので、頼朝は、これはひとへに氏神八幡大菩薩の御助であると、いよく／＼心中に祈念を深くなされた。かうして、一日でも命が生きてゐたら、念佛をも申し、經をも讀んで、父の後世を弔はうとて、卒都婆をつくらうとせられたが、附添人が刀をもたせなかつたので、丹波藤三をうまく説いて、小刀と木のきれとをくれといはれると、國弘が、

「何の手慰みをなさるのですか。頭殿をはじめまゐらせて、御兄弟が多く失せさせられたのに、お經をもお讀みなさらないで。」

と申したので、頼朝は、

「天下にわしよりもつと物思ひのある者はあるまいと思ふ。去年の三月には母におくれ、今年の正月には父が討たれたまふ。義平、朝長にもお別れする。さればこの人々の菩提をも弔はうと思つて、卒都婆をなりとも作りたいと思ふのだ。殊に故頭殿の六七日はけふあすである。四十九日も近づくので、格別な供物や施僧の儀こそ出來ないでも、それをせめてもの志に

しようと思ふので、刀を求めるのである。」

と言はれたから、國弘も哀れに思つて、彌平兵衛にこの由を語ると、宗清も感じ奉つて、小さな卒都婆を百本作つて差上げた。頼朝は自分でも塔を作り、字を書いて、或僧に頼んで、きたりの通りに供養の儀を遂げられた。池殿はかういふことなどを聞かれると、いよいよかはいさうにおぼしめしたので、いろ／＼に申されて、つひに流罪に定まつた。

其時、或人が申すのに、

「大草香親王の御子眉輪王は、七歳の時に、父の敵、

を害し

(五) 栗屋川次

郎貞任が子の千代童子は、十二の年に、甲冑を身につけて父と一緒に討死した。頼朝はすでに十四歳である。父が討たれたと聞きながら、自害をもせず、尼に附いて、かひなき命を生きようと歎くとは、見苦しい振舞ひである。」

と申すと、また或人は、

「いや／＼恐ろしいことだ。義朝が不義の謀叛にくみして、運命を失ふ事は當然の事であるが、よく／＼事の仔細を考へるのに、保元の忠節は拔群でありながら、恩賞がこれに釣合はな

いで、大體、清盛に劣つてゐる。そこで勳功のうすい事を恨んで起す所の叛逆であるから、君の御政の正しくなかつた事から起すところであるが、下として上を凌ぐが故に、身を滅ぼしてしまつたのだ。けれども、大忠の遺徳は家にとどまつてゐる。であるから、一族のうちには必ず其家門を榮えしめる者が出て來べきである。頼朝は幼いといつても、父が子であるから、さういふ事を心に考へて命を惜しむのだらう。いかなる名將勇士も、命があつての事である。されば越王が會稽の恥を雪いだのも、命を全うしたからである。たとへば異國に、越王勾踐と吳王夫差とて、兩國の王が、互に國を合せやうと争ふが故に、吳は越の代々の敵である。そこで越王は十一年の二月上旬に、臣の范蠡に向つて、『夫差はこれ我が父祖の敵である。討たないで年を送ることは、人の嘲を受けるところである。今我れは向つて吳を攻めよう。汝はわれに代つて國を治めよ』といはれるのに、范蠡が申して曰く、『越は十萬騎、吳は二十萬騎である。小を以て大に敵しません。又、春夏は陽の時、忠賞を行ひ、秋冬は陰の時、刑罰を専らとする。今は春の始である。征伐をする時ではありません。隣國に賢人があるのは敵國のわざはひであるといはれてゐます。わけてもかの臣の伍子胥は、智謀に富んで人をなづけ、考へ

が深くて主君を諫めてゐます。これが吳を討つによろしくない三つの不可であります』と諫めると、勾踐が重ねていふのに、『禮記に、父の仇とは俱に天を戴かずとある。軍の勝敗は必ずしも兵の多少によらない。時の運に従ひ、時の謀に由るものである。是れ汝が武略の足らないところである。若し時をもつて勝負をはかるとすれば、天下の人がみな時を知つてゐる、誰か軍に勝たないものがあらう。是れ汝が智慮の浅いところである。伍子胥がゐる間は、討つことが出來ないといふなら、かれと我れとどちらが先に死ぬか分らない。いつになつたらやれるんだ。汝が愚の三つである』とて、つひに吳に向つたが、越王は負けて會稽山に引籠つたけれども、かなはなかつたから、降人となつて面縛せられ、吳の姑蘇城に入つて、手械足械をかけられ、獄中で苦しまれてゐると、范蠡が聞いて、いろ／＼と苦心した結果、籠に魚を入れて、商人に姿を變へて、姑蘇城へ行つて、一ぴきの魚を獄中に投げ入れたが、その腹の中に一句を入れておいた。そのことばは、『西伯囚羸里、重耳奔于翟、皆以爲霸王、莫死於許敵』といふのである。勾踐はこの一句を見ていよく命を重んじ、石淋をなめて、本國へ歸るときに、道に墓が出て來たのを、馬からおりて拜んだ。國人がこれを怪しんでゐるのを知つて、范蠡は迎へに參

つたが、『この君は勇氣のある者を賞せられるぞ』と申したので、近國の勇士が付き従つて、つひに吳王を滅ぼして國を併せてしまつた。だから世間の諺ことわざにも、石淋の味をなめて、會稽の恥を雪ぐ、と言つてゐる。頼朝も命さへ全ければと思へば、尼公にも付き、入道にもいつて、助かるのが肝心である。』と申した。

## 註

- (一) 禪尼の愛子家盛のことで、家盛はずつと前に死んだのである。  
 (二) 清盛の父、忠盛の事である。  
 (三) 重盛の事である。  
 (四) 頼盛の事である。  
 (五) 安倍貞任のこと。  
 (六) 手を前面に縛ること。  
 (七) 西伯は周の文王、重耳は晉の文公のことである。文意は、西伯は始め殷の紂王に囚はれて、姜里

の獄につながれ、重耳は始め國が亂れたので、逃げて翟といふ國に流浪したが、後には王となり覇となつた。だから、一旦軍が敗れて囚はれても、決して死を敵に許すことなく、どうでもして命を全うし、再起を謀らなければいけない、といふのである。

(八) 病氣の爲に尿道に生ずる石のやうなものである。これを嘗めて見て、その味を知つて藥を投ずれば、其病氣が治るといわれる。勾踐が囚はれて獄中に在る時に、吳王夫差がこの病氣に罹つたが、誰もみな其不潔なのを嫌つて嘗めることをしなかつたのを、勾踐が聞いて、嘗めて見て、其爲に夫差の病氣が癒つた爲に、すなはち吳王は喜んで勾踐を獄から出して本國へ歸らせたといふ故事があるのである。

(九) 勾踐が越の國に歸ると、無数の蛙が道に飛んで出たので、勾踐は、これは勇士を得て本意を達する瑞相であるとして、馬からおりて拜したといふ事があるのである。

### 常葉が六波羅へ参る

さて、清盛は、義朝の子どもが、常葉の腹に三人あると聞いて、しかも男子である、捜せよ、

と命ぜられたので、常葉の母を召出して尋ねられたところが、

「左馬頭殿がお討たれなさつたと分つた日から、子供をつれて何處ともなく迷ひ出ましてございます。どうして知つて居りませう。」

と申したので、

「なんでそんな筈があるものか。其母を搦め取つて尋ねよ。」

とて、六波羅へ召出して、さまざまに責め問はれた。母が泣く／＼申すには、

「わたしはもう六十の歳をも超えてゐます。けふあすとも知らない老の身を惜んで、まだ行先の長い孫どもの命をば、どうして失ひやうもないことですから、知つてゐても申しますまい。まして知らぬ行先を、何と申しやうもありません。」

と繰返したので、水責火責にも遭はされさうになつたのを、常葉が宇陀郡で此事を傳へ聞いて、母のために自分がつらい目にあふのなら仕方がない、自分のために母が苦しい目を見られるのは悲しい。神も佛も定めて憎いとおぼしめすだらう。子供は悪い事をした人の子であるから、つひには失はれてしまふであらう。隠しおほせない子供のために、罪のない母の命を失ふ

ことは悲しいと思つて、三人の子供をつれて都へのぼり、もとの住家へ行つて見たが誰もゐない。これはどうしたことかと聞くと、近邊の人が、

「先日六波羅へ召されて行きましたが、それきりお歸りになりません。」

と答へた。

常葉はまづ九條院の御所へまゐつて申すのに、

「女の心のあさはかから、もしや片時でもそばにおいて見られるかと、この幼い者どもをつれて、片田舎に隠れてをりましたが、わたくし故に、行先も知らない老いた母が六波羅へ召されて、つらい目にあはれてゐると承ると、あまりに悲しくて、恥をも忘れてまゐりました。すぐ幼い者と一しよに六波羅へおやり下さいまして、母の苦みをやめて下さいませ。」

と申すと、女院をはじめまゐらせて、其座に居合せた人々が、

「普通ならば、老いた母を失つても、後世をこそ弔へ、幼い子供をどうして殺されやうと思ふのに、子供をば失つても、母を助けやうと思ふ心はめづらしい。佛神も定めて憐れにおぼしめすだらう。長年この御所へ参ることは皆人が知つてゐる。」

とて、身なりも當り前に装はせて、親子四人を清らかな車で、六波羅へ遣はされた。

見なれた御所の中も、けふが見納めと思ふと、涙も更にとどまらない。名をのみ聞いた六波羅へも近づくと、屠所の羊のあゆみとは、我が身一つに知られた。常葉はすでに六波羅へまると、伊勢守景綱の取次ぎで、

「女の心のあさはかから、しばしもしやそばにおいて見られるかと、幼い者を引きつれて、片田舎に忍んで居りましたが、行先も知らない母を召しおかせられると承つて、御尋ねの子供を連れてまゐりました。母をばすぐに助けて下さいませ。」

と繰返して申すと、聞く人は先づ涙を流した。清盛はこの由を聞かれて、まづ子供をつれて参つたのは感心であるとして、やがて對面されると、二人の子は左右のわきになる、幼いのをば抱いてゐた。涙を抑へて申すのに、

「母はもとより罪のない身でございますから、御ゆるし下さいまし。子どもの命をお助け下さいとは申しません。一樹の下に住み、同じ流を渡るのも、この世だけの縁ではありません。貴い者も、賤しい者も、親の子を思ふならひはみなさうでございます。わたしは、この子ど

もを失つては、かひなき命を、片時も堪へてゐられようとは思へませんから、まづわたしを失はせられて後に、子供をばいかやうにともなすつて下さいますなら、この世の御情も、後の世までの御功德も、これに過ぎた御事はございません。生き残つて夜晝歎き悲しんでゐる事も、罪が深いと思ひます。」

と涙ながらに言ふと、六つの子が、母の顔を見あげて、

「泣かないでよく申上げなさい。」

といったので、母はいよゝゝ涙にむせんだ。さしも心強げにしてゐられた清盛も、しきりに涙がすすんだので、押し拭ひ押し拭ひして、さあらぬ様子をしてゐられると、さばかり猛き兵どももみな袖をしぼつた。堪へ忍んでゐられぬ人々は、多く座席を立たれたとかいはれる。

常葉は今年二十三、梢の花はやゝ散つて、少し盛りはすぎたけれども、却つて風情があるのとちがはない。もとより眉目容姿が人にすぐれてゐるのみならず、幼いときから宮仕へして物に馴れてゐる上に、辯口もよかつたので、道理を正しく思ふ心をつけたのである。緑の黛が

紅の涙に亂れて、物思ふ日數が経つたために、その昔ほどではなかつたが、打ちしをれてゐるさまが、なほ普通の人にはすぐれてゐるので、

「こんなことでもなければ、どうしてこんな美人を見られやう。」

と、皆人が申すと、或人が語つていふのに、

「美しいのも尤もよ。伊通大臣が、中宮の御方へ、人のきりやうのよいのを參らせようとして、宮中で美人といふ名を取つた者を、千人召されて百人選び、百人が中から十人選び、十人の中の第一として、この常葉をまるらせられたのだから、唐の楊貴妃、漢の李夫人も、これ以上ではなかつたらう。」

といふと、

「見れば見るほど美しいのも道理だわい。」

と申した。

さて、母はゆるされたが、

「この孫たちを失つて、あすをも知らぬ老の身が助かつたとどうしよう。情ない常葉だ。」

この老の命を助けようとか、あの子どもたちをば何をしに連れてまるつたらう。四人の子孫の事をくよくよ思ふよりは、ただ老の身を先づ失はせ給へ。」  
とて泣き悲しんだのも道理である。足音が荒らかにするのを聞いても、今や失はれる使であらうかと肝を消し、聲高に物を言ふのを聞いても、はや其事よと魂を失つたのに、大貳清盛がいはれるには、

「義朝が子どものごときは、清盛が勝手に計ふわけには行かない。主上の仰せを承つて執り行ふばかりである。うかゞひ申して、朝議に従はう。」

と言はれたので、一門の人々や侍どもが、

「どうしてそのやうに、氣の弱いことを仰せられます。この三人が成長するのは、もうすぐです。公達の御爲に、末の世が恐ろしいございます。」

と申すと、清盛は、

「誰もさうは思ふけれども、年の長けた頼朝を、池殿の仰せで助けておく上は、兄を助けて、幼いのを誅するわけには行かないから、よんどころない次第である。」



と言はれた。

常葉は子供の命がけふ延びるのも、ひとへに観音の御計おんはからひと思つたので、いよく信心を深くして、普門品を讀み奉り、子どもには佛の御名みなを唱へさせられた。かくて露の命も消えないで、春もなかば暮れた時に、兵衛佐殿ひやうさのすけどのは伊豆の國へ流されると聞えたので、我が子どもは何處へ流されるのかと、膽をつぶして伏し沈んでゐたが、幼いからとて、そのままにおかれて、流罪の儀にも及ばなかつた。

註

(一)九條院である。九條院が近衛天皇の皇后で、常葉が其雜仕であることは前にいつた。

(二)楊貴妃は唐の玄宗皇帝の寵妃、李夫人は漢の武帝の愛妃。

經宗、惟方が遠流に處せられ、後、また召返される

上皇は顯長卿あきながのの邸においでなされてゐたが、ふだんは御棧敷(二)おんさんじきに出でさせられて、通行人の往

つたり來たりするのを御覽なされて慰ませられてゐると、二月二十日の頃、内裏からの御命令であるとして、御棧敷おんさんじきを外から板でみしくと打ちつけた。上皇は深く御憤おんいきどほりになつて、清盛を召され、

「主上は幼くましましてば、かやうな御計おんはからひがあらうとは思はれない。これは無論、經宗、惟方が仕業と思はれる。縛めて參らせよ。」

と仰せられたので、畏まつて、

「前年の保元の亂には、親族を離れて、お身方に參つて忠を致しました。去年はまた自分一人の力で兇徒を誅戮ちゆうりやくつかまつり、一命を輕んじて君が御位みくらゐを安んじ奉りました。幾度いくたびでも、院宣いんせん、勅定ちよくちやうに従ひますでございます。」

とて、やがて官軍をつかはし、經宗、惟方の邸に押寄せると、新大納言(三)しんたんのうのところでは、雅樂助通信みやがのすけのむねつとみ、前武者所信安まへむしやのむねやすといふ者が、二人討死した。けれども兩人ともに難なく召捕つて、御座所の庭内に引きすゑた。

すでに死罪に定まつたのを、法性寺(四)ほふしやうじの大殿が、

「昔、嵯峨天皇の弘仁元年九月に、右兵衛督藤原仲成を誅せられてから、去る保元元年まで、帝二十五代、年紀三百四十七年、その間は、死んだ者は再び歸らない、ふびんであるとして、死罪を停められてあつたのを、後白河天皇の御宇に、少納言入道信西が執權の時、始めて申し行つたが、中二年を経て、去年大亂が起り、其身がやがて誅せられた。恐ろしいことです。公卿の死罪はどうでありませう。其上、國に死罪を行へば海内に謀叛の者が絶えないと申しますから、かたぐもつて死罪一等をなだめて、遠流に處しませう。」

と申させられると、

「なるほど、大殿の仰せがよろしうでございます。」

と、諸卿も同じく申されたので、新大納言經宗は阿波國へ、別當惟方は長門國へ流された。太政官の記録には、「令三左近將監射ニ殺仲成於禁所」と記してあるから、本當に首をはねられたのは、もつと遠い以前になるであらう。

そのうちに、この人たちの隠謀が次第に顯はれて、上皇も信西の子らには罪のない由をきこしめされたので、即ち皆召返された。御政事について、御談合なされる方もないままに、一層か

の入道をしのばせられた。師仲卿もつひにのがれられなくなつて、播磨中將成憲の配所であつた室の八島へ遣はされた。伏見源中納言卿は、三河の八橋を渡るとて、

(五) 夢にだにかくて三河の八橋を

わたるべしとは思はざりしを

と詠まれたのを、上皇がきこしめして、哀れに思召されて、

「召返せ。」

と仰せになつた。全く詠歌の徳であらう。

その後、新大納言經宗も阿波國から召返されて、右大臣になる。人が阿波の大臣と申した。又、大宮左大臣伊通公が、

「長生きをすると、面白いことを聞くものだ。昔は吉備の大臣といふのがあつた。今度は粟の大臣が出來た。いつかまた稗の大臣が、出て來るだらう。」

と笑はれた。大饗が行はれることになつて、正客にこの左大臣をお招き申上げると、使者に

聞えるのもかまはずに、

「粟の大臣が上つて、旅籠振舞をせられるのか。伊通は参らないぞ。」と申された。

別當惟方は、上皇の御憤りが深くて、召返されさうにない由が聞えたので、心ぼそく思つたのか、故郷へ一首の歌を送られた。

この瀬にもしづむときけば涙川

ながれしよりもぬるゝ袖かな

(この配所に沈み果てることと思ふと、さきに流されて来た時の悲しさよりは更に一層悲しくて、袖も涙に濡れる事である。)

と詠んだのを、聞く人も哀れを催し、君も感動遊ばされたので、つひに赦免を蒙つて、上洛せられた。

註

(一)物見などをする爲に設けたところである。

(二)經宗である。

(三)雅樂寮の次官である。

(四)藤原忠通のこと。

(五)夢にだにかうして三河の八橋を渡らうなどは思はなかつたのに、今はかやうに親しく見てゐる、といふので、三河の三に見をかけてゐる。八橋は碧海郡の池鯉鮒の東にあつて、古來、在原業平の歌などでも名高いかきつげたの名所である。

(六)吉備眞備の事、黍にかけていふ。

(七)大饗は宴會で、大臣に任せられた人が公卿を饗應する事である。

(八)旅行に携へる籠から食物を取出して饗應すること、この籠は、本來は馬の糧を入れるものであるから、粟に縁があつて、面白い言葉となるのである。

### 頼朝の遠流附たり盛安の夢合せ

さて頼朝は伊豆の國へ流されたので、池殿は兵衛佐を召されて、泣く／＼いはれるには、

「きのふまでも御身の事でいろ／＼と心を碎いてゐるが、配所がきまつて流される事になりました。尼は若い時から慈悲深く、多くの者共を申し助けて來たけれども、今はかういふ年寄の申す事など、取上げられやうとも思はなかつたが、重盛がうまく申してくれて、いよ／＼命の助かることになつたのは嬉しい。この世での喜びが、これにまさるものはありません。」

としみ／＼いはれるので、頼朝は、

「御恩によつて、かひない命を助けられまゐらせた事は、幾度生れかはずとも、報じつくすことは出来ません。それについて、はる／＼と下つてまゐりますのに、我が家の家來の者が一人もありませんが、どうしたものでございませう。」

と申されると、

「ほんにそれも氣の毒な。親や祖父の時から召使はれた者も、世に恐れて隠れてゐませうに。今は罪をゆるされたと披露をしてごらんさい。」

と計はれたので、やがてその由を言ひふらすと、侍が幾人か出て來た。この侍共は皆一様に申すのに、

「今は進んで御出家の身となられて、お下りになりましたら、御安心でありませう。池殿も嬉しくおぼしめし、平家の人々も尤もの事と思はれませう。」

と言つてすゝめだが、頼朝の源五盛安ばかりは耳に囁いて申すのに、

「人は何と申しましたが、御髪をお落しなさいますな。君の御助かりなされたのは、只事ではありません。八幡大菩薩の御計ひと思はれます。」

と申すと、打領かれた。「御出家なさい」といふのにも、「なりますな」といふのにも、共に何ともいはれない心の中こそ恐ろしい。

永暦元年三月二十日に、いよ／＼伊豆の國へ下られるので、池の禪尼へ暇を申しに參られた。禪尼はつく／＼と見られて、

「不思議の命をお助け申した志がおわかりでしたら、尼が申すことを少しもたがはず、弓箭、太刀、刀、狩漁などといふことは、耳にも入れて下さいますな。人の口はうるさいものですか、よく氣をつけて、御身も再び憂き目に遭ひ、尼にも二度と悲しい事を聞かせては下さるな。」など、こま／＼と言はれると、頼朝は今年十四であるから、いはゞ幼稚であるけれども、人

の志の眞實なるを思ひ知つて涙にむせび、袖もしぼるばかりでゐられたが、やゝあつて、

「父母におくれましてからは、哀れをかけてくれる人もありませんのに、ねんごろの御志ありがたうぞんじます。」

とて、しきりに泣き沈まれると、禪尼も、全くさうであらうと心の中を思ひやられて、

「人はよく親の供養をする志の深いものが、神佛の御加護もあり、長生もするものです。經をも讀み、念佛をも申して、父母の後世を弔ひなさいよ。尼は子と思つてかういふことをも言ふのですよ。そのわけは、尼が子に右馬助家盛といふのがありました。その面影によく似てゐられるので、かはいく思ふのです。すべて眉目容姿、心ざまが人にすぐれて、鳥羽院に召仕はれて御覺がよかつたが、今の大貳殿がまだ中務少輔と申した時に、祇園の社で事を起し、社人の訴へがあつたので、山門の大衆が擧つて流罪にせられるやうにと、朝廷に申したけれども、君がかばつて山門の言ふ通りになさなかつたのを、弟の家盛がさまたげたのだとて、呪詛するといふ噂でしたが、本當に山王のおんたゝりであつたか、二十三の年に亡くなつたのですよ。かひない命を、堪へ忍んで生きてゐようとも思はなかつたのに、もう十一年になりました。」

た。何事につけても思ひ出さない時もないのに、御身の事まで起つて、涙をながして心をつくしたのに、先づ／＼嬉しい。御身は行末が長い。尼はあすをも知らない身であるから、名残が惜しい。」

と心苦しげに歎かれると、佐殿も、深切な情のほどを思ふにつけても、どうしてこの恩を報ずることが出来ようかと、夜もすがら泣いて明かされた。

三月二十日の曉に、池殿を出て、東路を遙かに下られた。郎等がいくらかあつたのもみな留められて、僅に三四人だけを連れてゐた。盛安も大津までとて、馬、鞍を尋常にしてお供をされる、佐殿は、

「ほかの人の流されるのは大きな歎きであるが、頼朝の流罪は、世にも稀な悦びである。」と言はれた。けれども、頼朝は内の藏人でもあつたから、宮中の生活も忘れがたく、後の宮の宮司でもあつたから、その御名残も惜しかつた。親でもない池の禪尼が、情をかけて下さるのにも別れてしまふと、袂のかわくひまもない。越鳥は南枝に巢をかけ、胡馬は北風に嘶くといふのも、生れた土地を慕ふからである。東平王といふ人は、旅の空で亡くなつたが、墓の上

にある草も木も、故郷のかたへとなびいた。生をかへての後までも、生れた土地は忘れない習ひであるのに、<sup>(四)</sup>追立の檢使、青侍季通は、粟田口から追々に、旅の所持品を奪ひ取つて、狼藉が殊に甚だしい。

盛安は大津までと申してゐたが、人々が留まつた上に、勢田には橋もなくて、船で向うの地へ渡られるのであるから、かたぐ心苦しくて、お送り申して行くと、社が見えたのを、

「どういふ神さまだ。」

と問はれるので、

「建部明神。」

と申す。佐殿は、

「では今夜は、この御前に通夜して、道中の祈をも申さう。」

とて、その社壇にとどまられた。夜が更け人が静まつてから、盛安が申すのに、

「都で御出家をいけませんと申しましたのは、不思議な御夢想を蒙つたからです。君は御淨衣で八幡へお詣りになつて、大床にゐられる。盛安はお供で、數多の石疊のうへに控へてをりま

すと、十二三ばかりになる童子が、弓箭をいだいて大床に立たせられた。『義朝の弓、胡籬を取つて参りました』と申されると、御寶殿の中から氣高い御聲で、『深く納めておけ。つひには頼朝に賜はるものだぞ。これを頼朝に食べさせよ』と仰せられたので、天童が物を持つて御前におかせられた。何か知らと見ますと、打鮑といふものです。君は恐れてすぐには食べられず、みると、『それを食べよ』と仰せらる。數へて御覽になると、六十六本あります。その鮑を兩方の御手でにぎつて、太いところを三口召しあがつて、細いところを盛安にお投げになつたのを、取つて懐へ入れると見て、目が覺めて思つて見ますのに、故殿こそ一旦は朝敵とならせられました。御弓、胡籬は八幡の御寶殿に納めおかれて、つひには君に賜はらせられるのでせう。又、打鮑を六十六本召しあがつたのは、六十六ヶ國を討ち従へられるのでございませうと、考へ合したのでございしました。」

と申すと、その返事はなさらないで、

「どうだ、せめて鏡の宿まで送らぬか。」

といはれたので、

「どこまでもお供したいとは思ひますが、八十の上になる老母が、病氣でをりまして、けふあすともわかりません。どうなりになりましたら、すぐにまゐりませう。」

と申しては見たが、お供のものもないからこそ、かくは仰せられるのだらう、と、また考へ直して、

「母のことはどうなりませうともよろしい。伊豆までお供いたしませう。」と申すと、

「それは思ひもよらない。志はありがたいが、お前の母が歎くやうな事になつては、いふまでもなくわしが悪い。母がどうなりなつたらまゐるがい。」

とて、再三とゞめられたので、詮方なく、泣く／＼都へ上つた。

兵衛佐殿は、尾張の國熱田大宮司季範の娘の腹である。男子二人、女子一人が同腹でおはした。女子は後藤兵衛實基が預かつて、都にかくしてあつた。今一人の男子は、駿河の國の香貫といふものが捕へて、平家へ奉ると、希義といふ名をつけて、土佐の國の氣良といふところへ流されてゐられたので、氣良の冠者と申した。兵衛佐は伊豆の國で、兄弟が東と西とへ別れ

て行くのも、前の世からの約束事で悲しいことである。

註

(一) 頼朝は保元三年に皇后宮權少進となり、平治元年に藏人に補せられた。

(二) 越は南方の國、胡は北方の夷の國。

(三) 支那の後漢の光武帝の第三子である。

(四) 流罪に處せられたものを都から追ひ立て、確と出立したのを見届ける役人。

(五) 矢を盛る器で、其形はほゞ籠に似てゐる。

(六) 鮑の肉を長くへいで乾したものである。昔は肴に食べたのである。

### 牛若が奥州に下る

さて常葉を清盛はすこぶる愛して、近い所に引取つて通はれたといふことである。さればその腹の男子三人は流罪をもまぬかれて、兄の今若は醍醐寺に登り、出家して禪師公全濟と申し

た。世にも稀れなあばれ者で悪禪師といつた。中の乙若は、八條の宮に仕へて、卿公圓濟と名乗つて、役僧になつてゐた。弟の牛若は、鞍馬寺の東光坊阿闍梨蓮忍が弟子、禪林坊阿闍利覺日が弟子になつて、遮那王と申した。十一の年とかに、母の申したことを思ひ出して、諸家の系圖を見ると、まことに清和天皇から十代の御苗裔、六孫王から八代、多田の満仲が末葉、伊豫入道頼義が子孫、八幡太郎義家が孫、六條判官爲義が嫡男、前左馬頭義朝が末子であつた。いかにもして平家を滅ぼし、父の本望を遂げようと思はれたのは恐ろしい。晝は終日學問を事とし、夜は終夜武藝を稽古せられた。僧正ヶ谷で天狗と毎夜兵法を習つたなどともいはれる。されば、早足や飛越は人間の業とは思はれなかつた。

母の常葉は清盛に思はれて、姫君を一人生んだけれども、寵愛がおとろへて後は、一條の大藏卿長成の奥方となつて、子供を大ぜい生んだ。この遮那王のことは、蓮忍も覺日も心配して、「出家をなさい。」

といふと、

「兄二人が法師になつたのさへ残念なのに、やす／＼はならないぞ。兵衛佐に相談した上

だ。」

などと申された。強ひていふと、突き殺すの刺しちがへるのと、内々もいはれたので、師匠も、常葉も、繼父の大藏卿もどうしやうもなく、たゞ平氏の耳に聞えやしないかとそれのみを歎かれた。

或時、奥州の金商人の吉次といふものが、都へ上ると必ず鞍馬へお詣りに來るのに逢はれて、

「この小僧を陸奥國へ連れて行つてくれ。えらい人を知つてゐるから、お禮にはお金をもらつてあげるよ。」

と言はれると、

「お連れ申すことは造作ありませんが、坊様方のお叱りを受けませう。」

「この小僧がなくなつたところで、誰が捜すものか。ちやうど土用の死人を、盗人がとつたやうなものだらう。」



と言はれると、

「それなら文句はありません。」

と約束したが、

「ただし出立の日は、同行の人はからひできませう。」

と申してゐる所へ、其人がまた参詣した。遮那王は話し寄つて、

「あなたはどこの國の人で、何氏ですか。」

と、こま／＼と聞かれると、

「下總の國のものです。深栖の三郎光重の子で、陵助頼重と申して、源氏でございます。」

と答へたので、

「そいつは遠慮に及ばない人だ。誰と親しくなされてゐます。」

「源三位頼政と親しくして居ります。」

と申すと、

「今は何をか隠しませう。前左馬頭義朝の末子です。母も師匠も法師になれと申されるが、

考へるところがあつて、今までは過して來ましたけれども、いつまでもこのまま都に住んでゐる事はむつかしからうと思ひます。あなたが連れて、先づ下總まで下つて下さい。それから吉次をつれて、奥州へ通りませう。」

と委しく語られたので、

「よろしい。」

と約諾して、生年十六と申す承安四年三月三日の曉に、鞍馬を出て、はるかに遠い東路をさして行かれた心のうちは悲壯である。

その夜、鏡の宿に着くと、夜がふけて後、手づから髪を取りあげて、懐から烏帽子を取り出し、ぴつたりと着けて、曉に出かけられたので、陵助が、

「もう御元服なされたのですか。お名前はどうしました。」

とお尋ねすると、

「烏帽子親もないのだから、自分で源九郎義經と名乗つた。」

と答へて、連れ立つて、駿河の黄瀬川に着くと、北條へ寄らうとせられたのを、

「父であります深栖三郎は、見参に入つて居りますけれども、頼重はまだお目にかゝつてをりません。後日にお手紙で仰有いませ。」

と申したので、そのまま深栖へ行かれた。

こゝに一年ばかりゐられたが、武勇が人にすぐれて、山賊や強盗を縛められる事が凡夫の業とも見えなかつたので、

「雖は囊から出るといひますから、いつかは平家に聞えませう。」

と深栖三郎も申すと、

「では奥州へ行かう。」

とて、まづ伊豆に越えて、兵衛佐殿に對面し、この由を申して、

「もし平家が聞きましたら、御爲によろしくありません。ですから奥州へ下りませう。」

といはれると、佐殿は、

「上野國の大窪太郎が娘は、十三の年に熊野へ参つた時、亡き父上のお目にかかつて下つたが、父親の太郎が亡くなつた後、『人の妻となるなら、平氏のものとは一しよになるまい。同

じことなら秀衡の妻とならう』とて、女が夜逃にして奥州へ下つて行くうちに、秀衡の郎等の信夫小太夫といふものが、途で行逢つて横取して、二人の子をまうけた。今も後家分を得て、らくに暮してゐるはずだ。それを尋ねて行くがよい。」

とて、手紙を書いて與へられた。

そこで奥州へ行かれて、お手紙を届けられると、夜になつて對面申して、

「尼は佐藤三郎繼信、佐藤四郎忠信とて二人の子をもつて居ります。繼信のはうは御用には十分に立つ者ですけれども、上戸で、酒に酔ふと少し口が荒くなります。忠信は下戸で、天性きはめて正直の者です。」

とて差上げた。多賀の國府に行つて、吉次に尋ね逢つて、

「秀衡がもとへ連れてゆけ。」

と言はれたので、平泉に行つて、秀衡に召使はれてゐる女房について申すと、すぐにお入れ申して、

「公然とお護り致しましたら、平家に聞えて咎めを受けませう。其時、出して平家にお渡しし

たら、永く武士の名折となりませう、お渡ししなかつたら、天下の亂みだれとなりませう。陸奥、出羽の兩國の間では、國司と目代もくだいとの外は、みな秀衡が思ひのまゝです。しばらく忍んでおいでなさいませ。ごきりやうのいゝ若殿の事ですから、姫ひめをもつ者は掣ひにもお取りませうし、子のない者は子にもお迎へしませうとぞんじます。」

と申すと、

「義經もさう思つてゐます。ただし、金商人かねあきんどをだまして、連れて下つて來ました。何なりやつていただきたいのです。」

と言はれたので、金三十兩を取り出して、商人あきんどにやられた。

其時、上野國かうづけのの松井田まつみだといふところに一晩泊ひとばられたが、家のあるじといふ男を見られるに、大剛だいがうの者と思はれたので、後、平家を攻めに上のぼられたときに、家來にして連れられた。伊勢國の目代もくだいと一しよに上野かうづけへ下つたのだが、女に附いてとどまつた者であるから、伊勢三郎とせられ、

「わしの烏帽子(五)かほしご子の始はじめだから、義の字をさかんにしよう。」

とて、義盛とつけられた。堀彌太郎といふのは、金商人かねあきんどである。

註

- (一)後白河天皇の皇子圓惠法親王のことで、天王寺の別當であつた。  
 (二)男子が元服して、童形を改め、初めて烏帽子を冠る時に、其人に烏帽子をつけさせ、烏帽子名をつける人である。烏帽子名には烏帽子親が自分の名の一字を與へるのが普通である。  
 (三)後家相應の隠居料のこと。  
 (四)國司は今の縣官のやうな者。目代は國守が任に赴かぬ時に、その代理をなすものである。  
 (五)烏帽子親に對していふ。即ち、烏帽子親から、その烏帽子をつけ、烏帽子名をつけた人を指していふのである。

### 賴朝が義兵を擧げて平家を退治する

兵衛佐殿ひやうすけのは、配所で二十一年の月日を送られたが、文覺上人もんかくしやうにんの勸めによつて、後白河法皇の

院宣をたまはり、治承四年八月十七日に、和泉判官兼高を夜討にしてから後、石橋山、小坪、絹笠などの所々の合戦に身を全うして、安房、上總の軍勢を以て、下總國を討ちなびけ、武藏國へ出られると、八ヶ國になびかぬ草木もなかつた。

醍醐の悪禪師全濟、八條卿公圓濟も、この由を聞いて、關を固めぬさきにと、急いで馳せ下られたので、平家はやがて土佐へ流した希義を討てと、其國の住人蓮池次郎權守家光に仰せつけられたので、家光が参つて、

「兵衛佐殿が坂東で謀叛を起させられたので、君をお討ち申せとの急使がまゐりました。」と申すと、

「よく知らせた。わしは毎日父のために法華經を讀誦してゐるが、けふはまだ誦みをはらない。しばらく待てよ。」

とて、持佛堂に入り、御經二卷を讀みをはつて、腹を搔き切つてうせられた。

九郎御曹司は、秀衡がもとにゐられたが、佐殿がすでに義兵を擧げられたと聞いて、すぐに出發されると、秀衡は、紺地の錦の直垂に、紅下濃の鎧に、金作の太刀を添へて、差上げ

る。

「馬はお入用なだけお取り下さい。」

と申した。やがて信夫に來られると、佐藤三郎は、

「公私の用を取りかたづけて後から参ります。」

とて留まり、弟の四郎はすぐにお供する。早くも白河の關は固めてゐたので、那須の湯へ湯治に行くのだとて通り抜けられ、兵衛佐殿が相模の大庭野に十萬騎で陣を取つてゐられたところへ、究竟の兵百騎ばかりで参られた。佐殿が、

「何者だ。」

と問はれたので、

「源九郎義經。」

とお名乗りなると、

「昔、八幡殿が後三年の合戦の時、弟の義光は刑部丞でおはしたが、弦袋を陣の座に留めて、金澤の城へ馳せ下られたのを、『故入道殿の再び生きてかへられたやうに思はれる』とて、鎧の

袖を濡らされたと聞いてゐる。」

と、しきりと喜ばれた。

甲斐源氏の武田、一條、小笠原、逸見、板垣、賀々美次郎、秋山、淺利、伊澤らが、駿河の目代廣政を討つたので、平家の大将小松權亮少將維盛は、その勢五萬餘騎で富士川の端に陣を取る。頼朝は足柄、箱根を越えて黄瀬川につかれた。その勢は二十萬騎である。平家の兵の中に、齋藤別當實盛が、

「源氏は夜討にするかも知れません。」

と申した夜に、富士川の沼におりてゐた水鳥が、軍勢におそれて飛立つた羽音に驚いて、矢の一つも射ずに、都へ逃げて上つた。

養和元年三月に、平家はまた美濃國の墨俣で支へた。卿公圓濟は義圓と名を改めてゐるが、深入して討たれた。醍醐悪禪師は、後に有職に任じて駿河阿闍梨と言つたが、僧綱に轉じて阿野法橋と呼ばれた。

壽永二年七月二十五日に、北陸道を攻め上つて來た木曾義仲が、まづ都へ入ると聞えたの

で、平家は西海に赴かれた。けれども、池殿の公達はみな都にとゞまられた。そのゆゑは、兵衛佐が鎌倉から、

「故の尼御前を見奉ると同じに思つて居ります。」

と、度々申されたので、落ち留まられたのである。本領を少しも相違なく、そのまゝ賜はつたので、昔の恩を報じられるのだと思はれた。

ところで、長田四郎忠致は、平家の侍たちにも憎まれたので、西國へも行かれない。かうしてゐてはやがて國のものどもに討たれるとでも思つたのか、父子十騎ばかりで、しよんぼりと鎌倉殿へ参つた。

「よく参つた。」

とて、土肥次郎にあづけられてゐるが、範頼、義經の二人の弟を都へ上らせられた時に、長田父子をも一しよにつかはされると、

「身を全うして合戦の忠節をいたせ。毒藥が變じて甘露となる、といふこともあるから、勳功があれば大きな恩賞を取らせるぞ。」

と約束せられた。それで木曾を退治し、平家の城、攝州一の谷を致落したりした注進の度ちゆうしんに、

「忠致、景致は軍をするか。」

と問はれるのに、

「又とない剛の者です。向ふ敵を討ち、當るところ破らないといふことはありません。」

と申すと、八島の城が落ちたと聞かれた時に、

「もうきやつ親子に軍はさせるな。返報してくれる。」

と言はれたが、軍が濟んで、土肥に附いて歸つて來ると、

「今度の振舞は殊勝であつたと聞いてゐる。約束の褒美をとらせるぞ。よく／＼氣をつけて頭殿の御供養をいたせ。成綱に仰せ含めてあるぞ。」

との事だつたので、喜んで退出したのを、彌三小次郎成綱が押しよせて、長田父子を搦めとり、磔にせられた。その磔もただではない、頭殿の御墓の前に、左右の手足をもつて竿をひろげさせ、土に板をしいて、土磔といふものにして、なぶり殺しにせられたのである。

「平家の方へも落ちて行かず、といつて、城に籠つて矢の一つをも射もしないで、身命を捨てて軍をして、ほしくもない恩賞を貰つたものだ。これもただ不義のいたすところ、悪業の報いたのである。」

と人々は申した。又、何者がしたのか、

きらへども命の程は壹岐のかみ

美濃尾張をば今ぞ賜はる

刈りとりし鎌田が首のむくいにや

かゝるうめきを今は見るらん

と詠んで、作者の名を鎌田政家と書いた高札を立てた。これを見るものはみな、哀れとは言はずに、唇を返して憎まぬものもなかつた。されば武の道に、血氣の勇者と仁義の勇者といふことがあつて、いふまでもなく仁義の勇者を本としてゐる。忠致、景致もずるぶん血氣の勇者で、拔群の者ではあつたが、仁義に缺けてゐたために、譜代の主君を討ち奉つて、つひに我が

身を滅ぼしたのである。

ここに池殿(八)の侍、丹波藤三國弘と名集つて鎌倉へ参つたので、

「わしも尋ねたいと思つてゐるが、公私の繁忙に取りまぎれて、つい無沙汰してゐた。」  
とて、すぐに對面して、

「只今納殿(九)にある物を、みな出して來い。」

と命ぜられると、金銀絹布など、いろ／＼の物を山のやうに積み上げた。

「これはまづ當座の引出物だ。訴へはないか。」

と問はれたので、丹波國の細野(十)と申す所は、代々傳へて來た領地である由を申すと、やがて御下文(十一)を給はつた。

「財寶(十二)を宿次(十三)に送らせろ。」

とて、都まで順々に届けてやつた。

あの時、かういふ運を開くべき人とは思はなかつたのだが、あまりに不憫(十四)に見えたので、深切に仕へ申したからである。兵衛佐(十五)が言はれるには、

「首は故池殿(十六)についでいただいた。そのお禮には、大納言殿を世に在らせ申した。髪は續續(十七)源五につがれた。しかし盛安は雙六(十八)の名人で、院中の御局(十九)の雙六に常に召され、院も御覽ぜられるのであるから、君の召使はせられる者をば、どうして呼び下せようと思つて、遠慮してゐるのである。」

と語られたので、この由を源五に告げたけれども、天性雙六(二十)が好きな上に、院中に参入するのを無上の名譽と思つてゐたのか、つひに鎌倉へは下らなかつた。

九郎判官は、梶原平三(二十一)が讒言(二十二)によつて、都のすまひが出来なくなつたから、又、奥州に下り、秀衡(二十三)を頼つて過されてゐるが、秀衡(二十四)が死後、鎌倉殿から泰衡(二十五)をだまして、判官を討たせ、後に泰衡(二十六)をも滅ぼされたのは恐ろしい。かくて日本國を残るところなく打ち従へられて、建久元年十一月七日、はじめて上洛せられたが、近江の國の千の松原といふ所に着かせられて、淺井の北郡(二十七)の老翁を捜されると、二人の老人をつれてまゐる。土瓶(二十八)を二つ持参した。

「それはどうしたのか。」

と問はれると、

「君の昔、召しあがられた濁酒です。」  
と申したので、

「まことにさういふことがあつた。」

とて、三度飲んで、

「お前、子はないか。」

と仰せられたので、

「あります。」

とて奉る。すぐと召しつれられたが、足立が子になされて、足立新三郎清恒とて、近習のものになつたのがそれである。

「さてこの翁に引出物をやれよ。」

と仰せられたので、白鞍をおいた馬を二疋、いろいろの財寶を入れた長持を二さを賜はつた。又、昔の鶉飼を召出して、小平をやがて賜はつた。

都に着かれると、すぐに法皇の御所へ参られたが、法皇も昔の事を思ひ出でられて、殊に感

慨に堪へない御様子でおはしました。髭切といふ太刀が、清盛のもとにあつたのを、御守の爲とて院に召しおかれたのを、今度頼朝に賜はつた。青地の錦の袋に入れられてゐた。三度拜して戴いたといはれる。

この太刀についていろいろの説がある。頼朝卿が關が原で捕はれた時に、身に佩びてゐられたので、清盛の手に渡つて、院へ参つたのだと云々。又、或説には、今のはまことの髭切ではない。まことの太刀は、以前に青墓の大炊のところから参らせたのである。そのわけは、兵衛佐が大炊にあげられたのを、頼朝が囚人となられた時に、此太刀を尋ねられたので、今はかくしてもどうしやうもないと思はれたのか、ありのまゝに申されたのである。そこで、すぐに大炊のもとへ尋ねられたが、源氏の重代の寶を平家のはうへ渡してしまふのは悲しい。兵衛佐こそ斬られ給ふとも、義朝の公達は多いから、よもや跡は絶えまい。先づ隠して見ようと思つたので、泉水とて、同じ程の太刀があつたのを、抜きかへて参らせた。髭切は柄も鞘も圓作りである。さだめて佐殿に見せまゐらせられるであらう。佐殿がわたしと一つ心になつて、間違ひないといはれば、ものよりの事である。もしこれではないと申されれば、女のことですか



ら、つい取違へましたと申せば、差支あるまいと思案して、泉水を差出したのである。難波六郎經家が受けとつて上つたのを、やがて頼朝に見せられて、これかと問はれた時に、違つた太刀とは思はれたけれども、長者が心を推量して、それである由を申された。清盛が大いに喜んで祕藏せられたのを、院へ召されたのである。まことの髭切は、先年大炊の方から参らせたのであると云々。

その上洛の度に、盛安を召して、さまざまの財寶を賜はり、

「どうして今まで下つて來なかつたのだ。大きな莊をもやりたいけれども、ちやうど今は闕所がない。よいところがあつたらやるぞ。」

といはれた。

「まことに今まで参らないのは、自分一己の爲でないとは申しながら、不都合千萬な事で、が又、微運至極の事でもありません。」

と、盛安も申した。

建久三年三月十三日に、後白河法皇は崩御遊ばされたので、やがて盛安は鎌倉へ参つた。頼

朝は對面せられて、

「早く下つて來れば、よい所をもやれたのに、今まで遅くなつてはしやうがない。小さい所だが先づ馬飼料にでもせい。」

とて、多記の庄を半分賜はつた。昔からゆかりのある土地だと申したのか、美濃國の上の村といふ所をも、同じく賜はつた。

建久九年十二月に、朝廷へ馬を献じた折に、

「明年正月十五日を過ぎたら、急いで下つて來い。多記の庄をば残らずやらう。」

と仰せつかはされたのに、明くる正治元年正月十三日に、鎌倉殿は御年五十三で亡くなられた。源五はこれをも知らずに、十六日に京都を立つて馳せ下るうちに、三河國で早くもこのことを聞いたけれども、わざ／＼でも下るべき身であるから、鎌倉に下着して、自分の不運な由を語つたりするうちに、昔の夢想の不思議などを申すと、齋院次官親能が、

「その鮑の尾を、すぐ食べたときへ見てゐたらば、なほよかつたらうに。たまはつて懐に入れたばかりであつたからだらう、残る所があるのは。」

と申された。

ところで清盛公が兵衛佐を助けておかれた時に、よもや今に平家を覆す人とは思はれなかつたらう。同じく九郎判官の二歳で母の懷に抱かれてゐたのを、わが子孫を滅ぼすべき仇と思つたならば、どうして宥しておかれよう。しかし、これもみな八幡大菩薩、伊勢大神宮の御計ひと思はれる。趙の孤兒は、袴の中にかくれて泣かず、秦の遺孫は、壺の中に養はれて人となる、と申すから、人の子孫の絶えまいとするのには、かういふ不思議もあつたのである。

義朝は鳥羽天皇の御宇、保安四年癸卯の年に生れ、三十四歳で、保元元年に忠義をつくして勳賞を蒙り、朝恩に浴したが、今度の謀叛にくみして身を滅ぼした。けれどもまた、頼朝、義經の二人の子があつて、兵衛佐は三十四、判官は二十二歳で、治承四年に義兵を擧げ、會稽の恥を雪いで、再び家を榮えさせた。

頼朝は近衛天皇の久安三年丁卯の年に生れ、義經は二條天皇の平治元年己卯の年に生れたから、三人共に卯の年の人である。中でも頼朝は、平家をほろぼし、天下を治めて、文治の始に諸國に守護をする、あらゆるところの庄園、郷保に地頭を補して、武士の輩を勵まし、廢れた

家を起し、絶えた跡を繼いで、武家の頭となり、征夷將軍の院宣を蒙つた。卯は是れ東方三支の中の正方として、仲春をつかさどつてゐる。柳は卯の木である。三春の陽氣を得て、天道が恵みの眉をひらき、營みしげく榮えるのだから、柳營の職には、卯の歳の人はずまことに縁があつたのである。

註

(一)豫備の弓弦を巻いておくものである。革で、直径五寸ばかりの、蛇の目の紋形に作つたもので、その周圍に弓弦を巻きつけ、太刀の帶取に下げるのである。

(二)陣の座は、左近の陣の座、右近の陣の座とて、内裏の日華、月華の兩門内に在る。陣は軍陣の陣ではない。ここは義光が兄義家を援けるために、奥州へ赴くので、ふだん官から渡しておかれた弦袋を陣の座に留めて返上したのである。

(三)羽後の國の東南の方にあつた。

(四)伊豫入道頼義で、即ち義家、義光らの父である。

(五)僧職である。已諱、内供、阿闍梨の三つを有職といふ。

(六)僧官のことで、僧正、僧都、律師又は法印、法眼、法橋等の總稱である。

- (七)池の禪尼のことで、頼朝の恩人である。
- (八)平頼盛である。
- (九)用度品を入れておくところ、即ち納戸である。
- (一〇)官府から發する文書である。ここでは、細野の地は丹波藤三の所領であるといふことを記載した文書である。
- (一一)官物を遞送するやうに、公然と宿場から宿場へ傳遞すること。
- (一二)頼盛である。
- (一三)後白河法皇の御所。
- (一四)後白河法皇。
- (一五)義經のこと。義經は檢非違使尉であつたから、九郎判官といふのである。
- (一六)知行者のない明いた所といふことである。
- (一七)丹波國の多記郡の中であらう。
- (一八)支那の周の世に、晋の人がその國の大臣趙朔を殺し、且つその遺子の武を殺さうとしてこれを求めたが、母の傍の中にかくれて其難をのがれることを得た。後、長じて再び家を興した。事は『史記』に詳かである。秦の遺孫の故事は、出所は詳かでないが、其意味は前後の關係で、ほど見當がつく。

- (一九)郷は村を數箇併せたもの。保は組合の義で、即ち小さな領地を幾箇も併せたものを郷保といふのである。
- (二〇)十二支を四方に配當すると、寅卯辰は東方で、卯は其正中に位し、十二ヶ月を配當すると、正二三月が東方で、即ち卯は仲春に當るのである。
- (二一)漢の將軍周亞夫が細柳といふ處に營所を置いた故事から出てゐる。將軍の營所、即ち幕府のことであるが、ここは將軍の職には、といふ意と見ていふ。



印 檢

第十六回配本

昭和十三年二月十日印刷  
昭和十三年二月十三日發行

現代語譯國文學全集第十三卷

保元物語・平治物語

定價壹圓八拾錢

著者 前 田 晁

發行者 加 藤 雄 策  
東京市小石川區表町一〇九

印刷者 君 島 潔  
東京市小石川區久堅町一〇八

發兌 東京市小石川區表町一〇九  
非 凡 閣  
振替東京三六三三九  
電話小石川六六一〇

共同印刷株式會社印刷

7135-24



